日本医史学雑誌第二十九巻一号
昭和五十八年一月三十日　発行　　昭和五十六年九月十一日受付

安政年度のコレラ流行の北限について

松木明知

1　はじめに

WHOの天然痘撲滅宣言によって、地球上には最早、研究室の試験管内以外には天然痘のビールスは存在しないことになった。しかしこのビールスがまだ地球上の何処かに潜んで、何らかの機会に再び天然痘の大流行という猛威を振う可能性は全く否定出来ないと考えるのも、筆者一人の杞憂ではあるまい。

いずれにせよ、右に述べたWHOの宣言によって天然痘に対する国民の関心は慥かに減少し、これに代って他の流行性伝染病、例えばコレラなどが大きくクローズアップされてきた。この背景には、大型航空機などによって汚染地区などから多数の人々が極めて短時間内に移動するという現実を見逃すわけにはいかない。

コレラは罹患して極めて短時間に死亡することや「コレラ」の発音に近いことから「コロリ」(多くは「虎狼痢」の字を充てる)と称され激しい下痢症状から「暴瀉病」とも称呼された。安政年度のコレラの流行は、本邦の疫病史の中で、死亡者数からみても、最も猖獗の甚しかった流行の一つである。(1)

本稿では、日本の西南に発したこのコレラがどこまで北上したか従来全く不明であったので、文献的考察を加えてみた

い。

2　本邦における幕末のコレラ流行

諸先学[1]〜[5]の研究によれば、本邦におけるコレラ流行の嚆矢は、文政五年（一八二二）である。この流行は従来の研究では、直接中国大陸から長崎に伝播されたと考えられたが、近年三木博士[6]の研究によって、朝鮮、対馬を経由して我が国の下関に齎らされ、全国へ北上東漸したことが明らかにされた。この時の流行は江戸にまで及ぶことはなかった。

第二次の流行は、安政五年（一八五八）六月から万延元年（一八六〇）に至るもので、わが国の疫病史上、最も猖獗の甚しかったものの一つに数えられている。

米国船ミシシッピー号が長崎に入港して、コレラを伝播したものであった。

この時の流行では北上東漸の速度が極めて大であり、約一ケ月後には江戸でも大流行が始まった。諸書[2][4]に引用されている「諸宗寺院死人書上写」によれば、江戸での疫歿者は七月二十七日から九月二十二日までの五十五日間で二十六万人に及んだという。森鷗外の史伝でも有名な弘前藩江戸定府医官渋江抽斎も犠牲者の一人であった。

第三次の流行は文久二年（一八六二）八月、第四次の流行は、明治十年（一八七七）であった。すなわち江戸時代には、計三回のコレラの大流行が見られたわけである。

3　安政年度のコレラ流行—北限箱館説の疑問—

立川昭二博士[7]に拠れば、安政年度のコレラは遠く箱館までも及んだとしている。

しかし昭和四十八年著者[8]が『北海道の医史』を刑行した際、北海道の疫病史についても極めて丹念に調査したが、コレラ流行の史実は終ぞ発見することは出来なかった。

「古呂利考」[9]にも「安政五年戊午の秋は、長崎より始めて、山陰南海を経て、天下に遍く、其中江都甚しく、初冬の頃は、奥羽まで伝播し、雪天に至て初て止むと言ふ」とあって何ら箱館に至ったとは記されておらず、「武江年表」[10]にも「八月末の頃は（安政五年―著者註）、次第に曼延し、その辺際はたしかならねども、奥羽のあたりにもいたりしと聞けり」とあって、これもコレラの流行が箱館に至ったとは何ら記されていない。

箱館伝播説は、明治に入ってから編纂された「虎列利流行記事」[4]の左の記述が唯一のもので、立川博士は、これを参照されたものであろう。

是歳六月虎列刺病始メテ長崎ニ発シ其ノ勢ノ猛烈ナル僅カ二一月ヲ経テ速ニ江戸ニ伝播セリ。八月上旬ヨリ中旬ニ至ルノ際ニハ毎日ノ死亡千ヲ以テ算ヘリ京都大阪ハ八月ニ発シ蝦夷及ビ函館ハ七月ヨリ始マリ死亡願多シ然レ共江戸ニ比スレバ其害小少ナリキ

右の記述に従えば、安政五年七月より蝦夷地や箱館に伝播されたことにより、京都、大阪の流行より約一ヶ月早いことになるが、現在のところ、これを傍証するいかなる記録も発見されていないことは前述した通りである。多分この本の編者が、不確実な伝聞に基づいてこれを記載したものと考えられる。「武江年表」[10]にも「その辺際はたしかならねども、奥羽のあたりにもいたりしと聞けり」とあるように、当時でも流行の北限がどこまでであるかは知られていなかったというのが真実であろう。

4　東北地方における流行

安政年度のコレラ流行は、箱館に達していなかったとすれば、その北限は東北地方の何処かでなければならない。この問題を解決するため、著者は北海道、東北地区の図書館に安政年度のコレラ流行の有無についてのアンケート調査

を依頼し、併せて重要地区と考えられる約三十カ所には直接赴いて調査した。

まず北海道地区では、最近の調査によってもコレラ流行の事実は全くなく、著者はとくに函館において詳細に検索したが、それを傍証することは不可能であった。新北海道史[11]にも記載はない。

次ぎに、東北各地についての調査の結果を述べる。

福島県では、二本松藩史[12]によって安政五年（一八五八）八月からコレラが流行したことが推定され、翌安政六年（一八五九）九月には会津若松で「暴瀉病」が流行したことが、「会津年表」[12]によって明らかである。写真1は会津地方で、コレラ予防の呪として各門戸に掲げたものである。また写真2は安政六年（一八五九）九月、福島県のさる家の法名帳の一部で一家九人全員が病死したことを示しており、時期的にもコレラによる死亡であることは間違いないであろう。

宮城県におけるコレラの流行に関しては、既に青木大輔[13]～[15]博士の研究が有名で、記録から見て安政五年（一八五八）から翌年にかけてが猖獗を極めたことという。博士は同時に寺院過去帳の死亡者数を調査し、その傍証に努めている。

宮城県では石巻市蛇田東雲寺のコレラ供養碑が有名であり、（写真3）、これには安政六年八月より「痧病」つまり「狐狼病」が流行したことが刻されている。

写真 1

山形県では米沢で安政五年十月に流行し、上杉文書[16]には「米沢ニ於テ赤湯村類伝虎列刺流行ニ付テ……」とあり、また酒田[17]の余目村でも安政五年九月から翌年の七月に至るまで断続的にコレラが流行した。鶴岡[18]でも安政五年九月に流行が見られた。

岩手県においては、これまでの調査で安政年度にコレラが流行したという記録は披見されない。宮城県に近い一円や三陸の山田港などでも記録はない。盛岡も勿論ない。青木[16]も仙台領の登米辺りが太平洋側

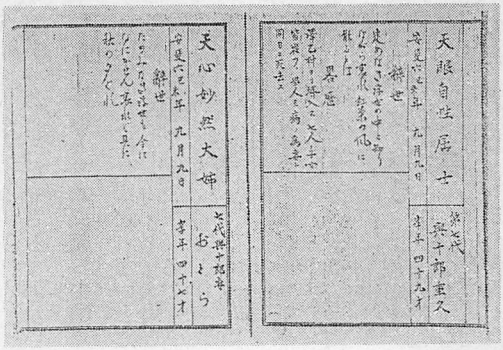

写真 2

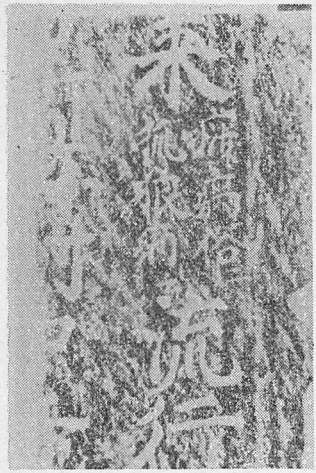

写真 3

の北限であろうとしており、岩手県内におけるコレラ流行の確証を示していない。

このことから考えれば、太平洋側の北限は宮城県の北部で、岩手県の南部あたりと推定されるが、将来の研究に俟ちたい。

さて秋田県では、秋田と能代（のしろ）の流行が知られている。しかし内陸の角館には伝播しなかったらしい。[19] 石井忠行の「伊豆園茶記」巻十七には次の如く記載されている。

安政五午年三都を始め諸国とも暴瀉病流行して黄泉に行しもの夥し、此病をコロリと名づく（ころりと思果てるといふ心なるべし）畿内辺にてはトンコロ（頓にころりか。ロり省きてふ）御国は翌六年の末の月能代より流行出す。其もとは同所本山方売木の木番人として下毛浜に住しもの、加賀越中の材木積船より伝染して市中に及び、三四十人亡ぶ。市中の男女鉦太鼓にて駆廻りて、厄病神を送り、御足軽は空砲を発す。奇妙なる山王祭礼の山車、上町（カンマチ）丁内の鐘馗を老若男女町中曳巡りしが、其翌日より一人も亡ぶものなしと、能代より出戸大内田森岡鹿渡などと伝染して久保田（秋田—著者註）に至る。山本群の釜屋村（八竜町）百軒に足らぬ家数にても八十人果てる。久保田はさのみ痛みなしと、或人より文音也。以下略。

右の記載は、秋田地方にはまず加賀からの材木運搬船によってまず能代に伝播し、同所から近隣の町村へさらには秋田へ伝播波及したことが明らかである。

最後に青森県であるが、太平洋側と日本海側に分けて考えなければならない。

まず太平洋岸であるが、極めて綿密な調査によっても、コレラの流行を示唆する記録を発見することは不可能であった。青木[16]も寺院過去帳の調査で、八戸では安政五年と安政六年の十月に死者が多かったが、その原因は明らかでないとし、コレラ流行の確証を認めることは出来なかった。

このことは、岩手県でコレラ流行の記録が披見出来ないことと併せ考えるならば、やはりコレラが、この地方に浸透しなかったと推定せざるを得ない。

太平洋側と日本海側の中間点に在する青森でも流行は見られず、ただコレラが江戸方面で相当流行しており、その伝播を注意しなければならないとしており、太平洋側では福島辺、日本海側では山形辺までコレラの流行が北上していることを左の如く伝えている。

伊東家文書[20]　九月二十一日

神明宮社内ノ祇園宮ニ而今日神楽仕候、江戸表大流行ノ暴瀉病夥敷死亡人ノ為追々北へうちり、出羽は山形辺、奥州は福嶋辺迄参り候由、寝心ノ義ニ付夫々二十一人やら組ヲ結今日御神楽差上申候、此方ノ御祖父様御頭取ニ可有御座候

この伊東家文書は市井の細いことまでも記録しているため、史料としての価値は十分認められている。これによって青森においても侵入してくるかもしれないコレラに対する恐怖は大変なものであったことが、十分に理解出来よう。そしてもし、実際にコレラの侵入があったとすれば、この文書に記録されないはずはないのである。

次に日本海側であるが、秋田県境に近い深浦（現在は青森県西津軽郡深浦町）に伝播していたことが、深浦町より少し北にある種里村の八幡宮の神宮の日記「永宝日記」によって闡明になった。

永宝日記[21]　安政六年八月

秋田能代に而暴瀉病人多死明家有之の由深浦迄流行右ニ付、於当社八月二十八日より朔日迄右退散之御祈禱執行

冒頭に「秋田能代」とあるが、当時秋田は久保田と称されていたから、これは「秋田と能代」の意味ではなく、「秋田の能代」と解釈すべきである。能代のコレラの流行がさらに北上して深浦にまで侵入したことが明らかである。

右の記録を傍証するため、深浦町を訪れたが、度重なる大火のため、コレラの猖獗を伝える文書記録は伝えられていない。さらに寺院過去帳なども一部失われており、参考に資すべきものは何ら遺されていなかった。また石巻市蛇田の東雲寺のコレラ供養碑の如き遺物も存在しない。

従来深浦町の史料だけを用いた研究で、コレラの流行の事実が発掘出来なかった理由がここにある。

深浦で流行したコレラが、さらに北上し、鰺ヶ沢さらには津軽半島の沿岸町村に及んだか否かは、定かではない。しかし、永宝日記には、右に述べた以外にコレラ流行についての言及が見られてないこと、また、筆者の調査によっても、右の諸町村での流行の事実が知られていないことから考慮すれば、一応能代から伝播したコレラが、一応深浦で終熄したと考えてもよいであろう。

青木[16]は下北の大畑の寺院の過去帳の調査で安政六年八月に死者が多かったとし、これを北海道からのコレラ流行の伝播によるものではないかとしているが、前述した如く、北海道でのコレラの流行は否定され、大畑の記録でもコレラの流行と認められるものはない。

おわりに

わが国のコレラ流行史上、最も猖獗を極めた安政五・六年度の流行の北限について、従来の蝦夷箱館説は何ら根拠がなく、伝聞に基づいたものであることが明らかとなった。

著者の研究によれば、福島、宮城、山形、秋田の四県にコレラの伝播が実証されるが、岩手県では実証されない。

青森県では日本海側の深浦町で、安政六年八月に流行した記録がある。これは秋田の能代から伝播されたものであった。

以上のことから安政年度のコレラ流行の北限は、現在の行政区画から言えば、青森県西津軽郡深浦町である。

青森県の南部ではコレラ流行の記録はなく、したがって太平洋側の北限は宮城県と岩手県の間あたりと推定される。

なお北海道については、「北海道の医史」以来検索を続けているが、未だその記録に接し得ず、結論的には、安政年度のコレラは、蝦夷地および箱館には伝播しなかったと断定せざるを得ない。

文献

(1) 富士川游、日本疾病史東洋文庫一三三、二一三頁、平凡社、昭和四十四年
(2) 山崎佐、日本疫史及防疫史、克誠堂、昭和六年、五三〇頁
(3) 藤井尚久、明治前本邦疾病史、明治前日本医学史、第一巻、日本学士院、一九五五年、二九二頁
(4) 小鹿島果編、日本尖異志、地人書院、昭和四十二年、疫厲之部三十一頁
(5) 中野操、増補日本医事大年表　一七一頁　思文閣、昭和四十七年
(6) 三木栄、朝鮮医学史及疾病史（私刊）昭和三十八年、疾病史第六十五頁
(7) 立川昭二、日本人の病歴、一四三頁　中公新書、中央公論社
(8) 松木明知、北海道の医史、津軽書房　昭和四十八年
(9) 浅田栗園　古呂利考　明治十三年
(10) 斎藤月岑、武江年表（下）東洋文庫一一八、平凡社、昭和四十三年

(11) 北海道庁、新北海道史、第二巻、通説一　六九六頁　昭和四十五年
(12)「会津年表」(北村金三郎編、大正三年)「二本松藩史」(昭和元年)
　いずれも私刊本。市立会津図書館蔵
(13) 青木大輔、宮城県疫厲志(藩政時代篇)宮城県史二十二災害篇　宮城県史刊行会　昭和三十三年
(14) 青木大輔、安政六年仙台領内におけるコレラ流行について――特に寺院の過去帳に於ける流行相(第一報)
　日本医史学雑誌、一二九〇号、一一一頁、昭和十六年
(15) 青木大輔、東北地方に於ける安政のコレラ流行について、
　日本医史学雑誌、十三巻、七十九頁　昭和四十二年
(16) 斎憲公御年譜草稿、上杉文書上　六八ノ二四、市立米沢図書館蔵
(17)「余目町史年表」所収「南野部落沿革」によれば「九月午時安政五年午より、翌未七月、八九月下旬之頃迄、所々在々暴瀉病流行し、諸人是が爰に命を失う者夥云々」
(18)「鶴岡三日町肝煎庄兵衛達書」
　安政五年九月二十一日に「此節難病流行いたし候ニ付、案心のため、当月二十六日より二十八日迄ニ夜三日之間大般若修行奉願被仰付」とこれがコレラであったことは、「防疫薬方処方書付」に「同月(安政五年八月)下旬頃より当国酒田を始宮之浦暴瀉病大流行治療不及して死するもの数百人、又在々斯のことし……」とあることによって明らかである。
(19) 石井忠行、伊豆園茶記巻十七、
　新秋田叢書(九)、一二三頁所収、歴史図書社、昭和四十七年
(20) 伊東善五郎、伊東善五郎文書
　(安政五年九月)、青森市史第七巻、資料編　三二〇頁所収　昭和四十一年、
(21) 松木明知　青森県の医史　津軽書房　七十七頁　昭和五十五年

The Most Northern Area of Cholera Prevalence in the Ansei Period (1858-1859)

by

Akitmo MATSUKI

A severe cholera epidemic brought into Nagasaki by the American ship "Mississipi" prevailed over Japan for several years during the Ansei period. This was the second case in the history of cholera epidemics in Japan. It was said that this cholera epidemics had been lacking.

The author performed a wide field survey on this subject and found that the most northern area where the cholera epidemics in the Ansei period prevailed was in Fukaura (Fukaura town, Aomori-ken presently) during August of 1859 and the disease was brought to this village from Noshiro town of Akita. So far, the author could not find any records or documents concerning the cholera epidemics during this period in the Yezo and Hakodate area, strongly suggesting that there was no prevalence of the disease in this area.